アンラーニングプロジェクトⅡ

ニューズレター

2012．12．16
生・労働・運動ネット
富山市神通町3-5-3
TEL 076-441-7843
FAX 076-444-6093

第1回　2012.10.28

「問題のありか――さらに日本の『構成的』解体の方へ」での論議から

私たちがこの世界に生きる中で身につけてしまっている体制的な価値観を「学び捨てる」(unlearn：アンラーン)ことに向けて、生・労働・運動ネットでは、この数年間、「アンラーニングプロジェクト」という自由な討論・学びの場を営んできました。現在、福島原発事故によって生きることの根底までも脅かされているという人々の切実な思いが、一方では原発事故をもたらした政治・経済システムの「復興」・再建のかけ声へとすり替えられ、他方では「尖閣」問題に象徴されるような排外的な国家意識へと導かれようとしています。そのような状況の中で、私たち自身の中の既存の価値観を「学び捨てる」ための言葉を生み出す営みが、改めて大きな意味をもつようになっていると感じています。そのような思いから、生・労働・運動ネットでは、「さらに日本の『構成的』解体の方へ」をテーマとして、「アンラーニングプロジェクトⅡ」をスタートさせています。10月28日（日)、表記のようなタイトルで、その第１回めの集いを行いました。以下、そこでの論議のアウトラインを紹介します。(なお、以下の「私」は、提起者自身を指す。)

□沖縄の「自己決定権の樹立」に日本の「構成的」解体で「応答」する

テレビや新聞では、原子力規制委員会で原発事故の際の避難の指針が出されたとか、社会保障審議会で生活保護基準の切り下げが論議されているといった、気になるニュースが毎日のように流れています。そのどれもが放って置いてはいけない問題だと思う一方で、そうしたことにも現れているこの国の政治や社会のあり方をもっと大きなレベルから捉え返すことをせずに、個別の問題を具体的にどう対応するかということだけで考えるのに耐えきれない、というところが現在の私にはあります。かなり抽象的な話になると思いますが、今日は、そうした思いで、この間、私が考えていることについてお話ししたいと思います。

昨年春から今年始めにかけて、生・労働・運動ネットでは、「沖縄セミナー・2011 in 富山」とい

う企画を行ってきました。歴史的にどこまでさかのぼって考えるべきことなのかはよく分かりませんが、ヤマト（日本本土）の私たちが沖縄という地域に対する大きな過ちを累積し続けてきた長い年月が、厳然としてあります。72年のいわゆる沖縄の日本「復帰」以降も、沖縄の人々は、日米合同の軍事支配体制による理不尽で暴力的な抑圧を堪え忍び続けています。沖縄の日本「復帰」から40年目を迎えようとするに際して、そのようなヤマトの私たちの側の沖縄に対する取り返しのつかない大きな過ちをどのように取り返すのか。その「問い」にきちんと向き合いたいという思いから、私たちは「沖縄セミナー」を企画しました。

現在でも沖縄では同様の事件が起き続けていますが、95年の沖縄・金武（きん）町での「米兵少女暴行事件」では、沖縄の「軍事植民地」的状況に対する沖縄の民衆の大きな怒りが噴出し、それが沖縄全土で米軍基地の撤去・解体を求める闘争にまで高まっていきました。そうした流れが現在まで途絶えることなく続いているという意味で、それは、日本「復帰」以降の沖縄の民衆運動の軌跡の中で一つの大きな画期であったように思います。そうした流れの中で、これまでの反基地運動とは一線を画することとして、日米両政府による暴力的な支配に対抗して、「沖縄をどうするかは、ヤマトやアメリカの政府ではなく、沖縄の私たち自身が決めることだ」といった、沖縄の「自己決定権の樹立」を求めるという方向性がこの数年、大きく浮上してきている、ということがあります。

「沖縄セミナー」の連続学習会の中では、沖縄自身の中に根強く内在する日本国家への同化志向を厳しく批判する思想的な営為として、沖縄の「日本」復帰前後の時期に展開された「反復帰論」のことが、何度も取り上げられていました。「反復帰論」は、当時の沖縄の文化人たちから、飲み屋で気勢を上げるような「居酒屋独立論」に過ぎないと酷評されましたが、現在、「反復帰論」で展開された思想が、沖縄の「自己決定権の樹立」として確実に沖縄の民衆の心の中に根付きつつあるように感じています。そうした沖縄で拓かれつつある沖縄の「自己決定権の樹立」という新しい地平に対して、ヤマトの私たちはどのように「応答」することができるのかが、今、まさに問われているように思います。

政治的な課題として、沖縄の人たちに大きな苦難を強いている「日米同盟」や日米安保条約の問題をどうするかということが間違いなくあります。しかし、それをどう解くかということの根底には、ヤマトの私たちがこの日本国家・日本社会をどうするかということが、きちんと据えられなければならないと感じています。「沖縄セミナー」では、私たちは、そのことをとりあえず、「日本の『構成的』解体」と呼んできました。もちろん、「日本の『構成的』解体」というのは、私たちが勝手に言っているだけのことに過ぎません。しかし、日米合同の軍事支配体制による「負の歴史」を負い続けてきた沖縄の人々が、沖縄の「自己決定権の樹立」に向けて動き出していることに対してヤマトの私たちが「応答」するためにも、現在のような日本国家・日本社会のあり方をいかに解体するかということが、自分たちにとっての切実な課題としてあるように思います。それは更に言えば、沖縄が一つの自律的な自治の単位として存在することが可能になるようなこの列島社会の構成はどうあるか、ということでもあるでしょう。その際に、沖縄が自律的な地域としてあることに相応しいように、私たちが生きるこの富山という地域の自治・自律をどのように考えることができるのかが、問われているはずです。

ある人が、北は北海道とその周辺の島から南は琉球弧までの連なりを、島々の「花綵(はなづな)」と名付けています。沖縄が一つの自律的な単位であることに相応しいように、「花綵」を構成する他の島々も自律的な単位としてあるというイメージでこの列島社会の未来像を思い描きたいというのが、私の「夢想」としてあります。アジアから見れば、沖縄を含むこの列島はアジアの東の端に位置

するわけですが、この列島上に存在する国家や社会をどうするかという課題は、日本という一国だけの視野から考えて済むことではなく、この間の「尖閣」・「竹島」をめぐる問題にも現れているように、冷戦後のアジアをどのように組み立てなおすか、ということでもあるでしょう。そこまで「大風呂敷」を広げると具体的にイメージしにくくなるのですが、沖縄での「自立」・「自己決定権の樹立」にヤマトの私たちがどのように「応答」するかということは、そのように、アジア全域を含めて考えるような思想的な広がりが求められるようなことなのではないか、と思います。

このような思いで私たちが「沖縄セミナー」を開催しようとしていた直前の時期に、東日本大震災とそれを引き金とする福島原発事故という大きな出来事が出来（しゅったい）しました。沖縄が日本国家にとっての「軍事植民地」的な状況に置かれていることと単純には比較できないと思いますが、原発が林立する福島を含む太平洋沿岸の東北地方は、首都圏に電気を供給するための、いわば、「電力植民地」的な状況を強いられています。そうした原発立地地域は、原発の誘致から稼働まで、地域の経済活動がそこでの生活圏や生態系の破壊・解体無しには維持できず、そのことで地域がますます原発に依存しなければならなくなるという逃れがたい悪循環の中に捕らわれています。そのように、沖縄と福島という遠く離れた地域が、この日本国家の中で共通して「周縁」的で被抑圧的な位置を強制されることを通じて、国家の支配秩序の維持という「役割」を担わせられるという構造の中に置かれています。

「3・11」という巨大な出来事の出来に際して、私がまず感じたのは、沖縄と福島、そして、そうした地域で抑圧を凝縮させることによって成立している国家・社会を生きている私たちという「トライアングル」に対して、私たちはどのように向き合うことができるのか、ということでした。そのような思いから、福島原発事故からおよそ1ヶ月後の昨年4月24日、「沖縄セミナー」の「プレ企画」として、「沖縄と東北、そして、私・たちが一つに連なる声の蜂起を！」という集いを行いました。「3・11」から1年半以上の時間が経った今でも、そのような思いは変わりませんが、そうした「沖縄と東北、そして、私・たち」という「トライアングル」に自分たちはどのように向き合うのかという「問い」が、残念ながら、日本社会や日本の運動の中で自覚的に捉えられているようには思えません。沖縄へのオスプレイ強行配備や、つい最近再び繰り返されてしまった米兵による沖縄人女性への暴行事件によって、現在、沖縄の人々の怒りは爆発寸前のところにまで達しています。しかし、ヤマトの私たちがそれにきちんと向き合うような形でどれだけ運動的な表現を生み出しているかと言えば、疑問に思わざるを得ません。「3・11」以降、大江健三郎のような知識人たちの呼びかけで、東京では数万人規模の大きな反原発集会が開かれていますが、正直言って、沖縄の状況をめぐってそのように多くの人々が声を上げるというところにまでは至っていないのが現状です。

日本政府による「尖閣」諸島の国有化以降、排外的な領土ナショナリズムが突出してきていますが、そうした風潮に対して、生・労働・運動ネットでは、今日の集いのほぼ1週間前の10月20日に、「路上表現：『尖閣』・『竹島』　誰のものでもない――フリーアイランド宣言」という小さな街頭アクションを、富山市中心部の街頭で行いました。この間、北朝鮮によるミサイル発射を口実として追撃用ミサイルＰＡＣ３を沖縄に配置したり、沖縄の先島諸島への自衛隊配備を進めようとする動きが現れていますが、そうした動きと連動しながら、「尖閣」・「竹島」をめぐる醜悪な領土ナショナリズムがこの国では露呈しています。

最近、少しインターネットの検索ができるようになったので、例えば、「日本解体」といった項目を検索してみるのですが、私が思っているようなものはほとんど出てこないのに、「民主党は日本を壊そうとしている」といった書き込みがたくさんあったりして、非常に驚いています。それらの中に

は、「中華人民共和国の成立時に毛沢東が計画した日本解体計画が、着々と進められようとしている」といった内容が、もっともらしく書かれているものもあります。そうしたネット上に氾濫する右翼的な言論の背景には、間違いなく、近年、グローバル世界経済の中で中国が無視し得ないポジションを占めるようになっていることと、それと同時に進行する世界経済の中での日本の地位の低下に対する危機感があります。そのような意味では、最近、露骨に台頭してきている国家主義的な傾向は、決して偶然現れたようなものではありません。

中国にも「民主派」と呼ばれるような政治的なグループが存在していますし、韓国では、日本以上にラジカルな直接行動が街頭や労働現場で繰り広げられていますが、そのような状況は台湾でも同様ではないかと思います。しかし、そうしたアジアの国々の活動家たちが「尖閣」・「竹島」問題をめぐってどのような発言を行っているのかについて私たちの耳には全く伝わってきませんし、そのような人たちと呼応するような動きを日本の私たちは創りだせないでいます。本来であれば、このような時こそ、アジアの民衆が国境を越えてどのような「接続」を生み出すことができるかがためされているはずですが、残念ながら、そのような動きは、この列島上では非常に貧しいように思います。

□　「日本の『構成的』解体」を「構成的権力」という視点から解きほぐす

先程から何度も言っているように、沖縄の問題というのは、基本的にはこの日本国家・社会をどのように解体するか、ということだと私たちは捉えています。ただ、そのことをそのまま言うだけではあまり意味がないので、「日本の『構成的』解体」ということのイメージをふくらませるために、もう少しその言葉を解きほぐすことをしてみたいと思います。

「日本の『構成的』解体」と言う時の「構成」というのは、日本語では要するに何かを「組み立てる」ことですが、それを英語で言うと、"constitution" という言葉になります。その"constitution" という英語は、同時に「憲法」を意味するのですが、その派生語である"constitutent" という形容詞は、「憲法を制定する権能をもつ」という意味になります。世界的に活躍しているイタリア出身の活動家・知識人のアントニオ・ネグリが「構成的権力」という本を書いていますが、彼がそこで展開している思想は、私が「日本の『構成的』解体」ということを考えようとする上での大きな手がかりとなっています。彼がそこで言っているのは、一言で言えば、この世界には、「憲法を制定する権力」と「憲法によって制定される権力」という二つの権力がある、ということです。

私たちを支配している日本の国家権力は日本国憲法に基づいているわけですが、そのように、日本国憲法というものが既に成立していることを前提として、それに依拠して合法的に根拠づけられているような権力を、ネグリは「構成された権力」と呼んでいます。それに対して、憲法を新しく制定する力能をもつ民衆の権力、ネグリの言い方では、「構成的権力」というものがあるわけです。日本の私たちは、歴史的に自らの手で憲法をつくったという経験がありませんし、日本の私たちの政治的な感覚の貧しさということなのでしょうが、現行の日本国憲法にしても、誰がそれを創りだしたのかということは、私も含めて多くの人たちにとって実感を伴った問いとしてはないと思います。そのように、ネグリの言う「構成的権力」というのは、憲法を生み出す民衆の力能によって、それまでとは異なる国家や社会のあり方を新たに創りだす権力だと捉えてもいいでしょう。

「日本の『構成的』解体」というのは、そうした民衆側の「構成的」な力能によって、現在のような日本のあり方を解体したい、ということです。憲法というものは、一つの社会的な共同態をどのよ

うな原理で構成するかをめぐる人々の集合的な意識を集約するものですので、憲法という全ての法の上に立つものを新たに創りだすということは、それまでの国家・社会の基本的なあり方を解体するに等しい意味をもつことになります。現在の私たちにとってのさしせまった課題に引きつけて言えば、それは、沖縄での「自己決定権の樹立」を求める動きに向きあうことができるようなものとして、この列島上に存在する国家・社会を解体し、組み替えなおすための社会構成的なプロセスをいかに創りだすか、ということになるでしょう。私は別に、一挙に現在の国家・社会のあり方を変えるといったことを考えているわけではありませんが、まさに新たな憲法を制定にするに等しいような社会構成的なプロセスをこの列島上に生み出したいということが、「日本の『構成的』解体」と言う際の私の問題意識としてあります。

先程も言ったように、今、私たちの目の前には緊急に取り組まなければならないような社会的な問題が山積みになっていて、こんなひどい社会になってしまうことをなぜ私たちは許してしまっているのだろうかという思いになるような日々が続いています。ただ、その一方で、そうした個別の問題に取り組んでいくことのずっと向こうに、そうした問題に関わる多様な運動が民衆の「構成的」な力能として一つに合流するような地点があるのではないか、という思いが私にはあります。しかし、日本の運動の中にそのことをきちんと表現するような言葉がないために、ネグリの考え方に刺激を受けて、私たちはそのことをとりあえず、「日本の『構成』的解体」と言っているわけです。

□新たな社会構成的プロセスとして「2011年から」の運動を捉えなおす

2011年前後の時期を中心に、エジプト・カイロのタハリール広場の占拠・ムバラク政権打倒に象徴される「アラブの春」と呼ばれた動きから、アメリカ・ニューヨークのズコッティー公園の占拠まで、世界的な広がりで「オキュパイ運動」が展開されてきました。そうした運動のインパクトを私としてはなかなか受け止められずにいたのですが、最近、ようやく、そのことの運動的な意義を考えたい、という思いになってきています。　先程も触れたアントニオ・ネグリが、マイケル・ハートとの共著として最近出した本として、原著のタイトルでは”Declaration”、日本語では「宣言」という本があります。ネグリとハートの二人は、その前にも、運動や思想の領域で世界的に大きな影響を与えている「帝国」という本を共著として出しています。実は、ネグリとハートの「宣言」という本の日本語訳はまだ出版されていないのですが、「この翻訳はまだ暫定的なもので、後で訂正したり、改善を加える予定です」といった但し書きを付けて、その全文の日本語訳をインターネット上で公開している人がいます。

ネグリとハートの「宣言」は、私にとって大きな刺激を与えてくれるような内容のもので、私はそれを読むことでそれまでに考えてきたことを前に進めることができた、という感触を得ています。私が「日本の『構成的』解体」と言っていることを、ネグリとハートの「宣言」では「グローバル資本主義の解体」と言っていますが、そうした観点から2011年からのオキュパイ運動をいかに捉えなおすかということがそこでの大きなテーマとなっています。その序章に当たる部分を中心に、ネグリとハートがそこで言っていることを紹介していきたいと思います。

「宣言」と言うと、皆さんの中にはマルクスとエンゲルスの「共産党宣言」を思い浮かべる人もいると思いますが、その場合の「宣言」は、英語で言うと「マニフェスト」（manifesto）という言葉になります。それに対して、ネグリとハートは「宣言」の中で、「これは、マニフェストではない」と

言っています。つまり、マニフェストとは、「きたるべき未来の世界をかいま見せてくれる」ような未だ明確な形を取らない変革主体や、未来において「具体的な勢力として現れ出て、変革のエージェントとなるべき人々を呼び出す」ためのものであり、古代の預言者のように、そのヴィジョンによって「選ばれし者」を創りだすものです。しかし、ネグリとハートによれば、今日の社会運動は、そのような実際の運動主体の登場の前にそれを予告して導く「預言者」的な指導者がいるといった順番を逆転させて、「変革のエージェントはすでにストリートに降臨しており、都市の広場を占拠している」し、そのことを通じて「新しい世界のヴィジョンを生み出してもいる」のです。

2011年前後に世界の各地で繰り広げられたオキュパイ運動の流れをもう一度たどりなおすと、まず、2010年12月に、露天商を営む失業中の若者が警官の横暴な取り締まりに抗議して焼身自殺を行ったことを契機に、チュニジアの独裁者ベン・アリの追放運動が行われます。翌2011年1月、エジプト・カイロのタハリール広場が民衆によって占拠され、ムバラク大統領が退陣に追い込まれた後、「アラブの春」と呼ばれるような動きがアラブ全土に一挙に拡大していきます。

2011年3月には、カイロのタハリール広場を占拠した人々に連帯の意を表して、アメリカのウイスコンシン州の州議会議事堂が占拠されます。2011年5月には、スペイン・マドリッドのプエルタ・デル・ソル広場が「インディグナードス（怒れる人々）」によって占拠されます。その背景には、緊縮財政の「再建」策の下での経済格差・貧困の拡大がありますが、そうしたスペインの「怒れる人々」の運動は、同じく緊縮財政策の下でアテネのシンタグマ広場を占拠したギリシャの人々に受け継がれます。2011年8月、黒人系イギリス人男性の警官による射殺事件をきっかけとして、イギリス・ロンドンのトッテナムで暴動が発生しています。2011年9月には、「私たちは99％だ！」という後に有名になったスローガンを掲げて、アメリカ・ニューヨークのウオール街の占拠行動が行われています。

ネグリとハートの「宣言」の序章には、「オープニング：運動のバトンリレー」というタイトルが付けられています。「宣言」の中では、「運動の『バトン』を受け継ぐ」という言い方もされていますが、この間、世界各地で展開されているオキュパイ運動では、その一つ前にあった運動を受け継いで次の運動が展開されるということが、目的意識的に行われているように見えます。もう少し運動の具体的なあり方について言えば、この間のオキュパイ運動に共通する顕著な特徴として、大きな運動組織や政治グループが人々を「動員」することなしに行われている、ということがあります。もちろん、世界の各都市で大規模なオキュパイ運動が繰り広げられる際には、私たちの知らないところでそれに向けた準備を進める人たちがいるのでしょうが、都市の広場を占拠する人々の大多数は、間違いなく、運動の「指導者」からの指令や動員ではなく、自らの意志でそこに来ていると言ってもいいように思います。

世界の各都市でのオキュパイ運動で占拠された広場で実際に主張されていることは、必ずしも同じではありません。アラブ世界では「独裁政権の打倒」、スペインやギリシャでは貧困の拡大による社会の過酷な階層化に反対するということがメインスローガンになっていますし、ニューヨーク・ウオール街でのオキュパイ運動では、「1％」に過ぎない金融資本が「99％」の民衆を支配していることへの抗議が行われています。それでは、そうした主張の違いを超えて、世界各地のオキュパイ運動が相互に連動しあっていることの内実がどこに現れているかということですが、ネグリとハートは、それぞれのオキュパイ運動を貫いて、新たな社会を構成するためのプロセスが生み出されている、と言っています。「宣言」の中では、そのことについて、「これらの運動のサイクルの最もラジカルで、最も遠大な諸要素の一つは、代表＝代行の拒絶と、直接民主主義的な参加のスキームの構築」であり、「大切なのは、マルチチュード（民衆）の要求に対して常に開かれたままでいるような新たな社会構成的

プロセスを創り出すこと」だ、という言い方をしています。

南アメリカの国々は、早い時期からネオリベ経済政策の「実験場」にされてきたのですが、アルゼンチンではそれに対して激しい民衆闘争が展開されました。その時の有名なスローガンに、「みんな出て行け。一人も残るな！」というのがあります。それは、言い換えれば、「私たちの『代表』を勝手に自認するような政治家連中は全員退場しろ」ということですが、ネグリやハートが言っているのは、そうしたスローガンにも直結することだと思います。つまり、自分たちの意思や意識を何者にも代表させることなく、自分たちを直接的に政治的な主体として構成するということです。

また、ネグリとハートは「宣言」の中で、「アメリカ独立宣言」の一節をパラフレーズして、民衆が政治的な闘争を通じて獲得してきた譲り渡すことのできない諸権利には、「『生命・自由・幸福追求の権利が含まれる』だけではなく、『コモン』に対する自由なアクセス権や、『コモン』の持続可能性に対する権利が含まれる」と言っています。ここで言う「コモン」とは、共有地や水、また、公共サービスや、電気のようなエネルギーも含まれると思いますが、人間が生きる上で誰にとっても必要な資源であると共に、人々の共有物として私有化されずに確保されるべきものとして捉えてもいいと思います。世界各地でのオキュパイ運動では、そこで主張されていることの違いを貫いて、代表＝代行の拒否に基づく直接民主主義的な社会構成的プロセスが生み出されていると同時に、そうした「コモン」に対する人々の要求が表現されていると、ネグリとハートは言っています。その時に、何を私たちにとっての「コモン」として「構成」するかということ自体が、重要な社会構成的な営みとしてあるわけです。

「2011年から」のオキュパイ運動については、とりわけ、アメリカでの運動を中心に日本でも紹介されるようになっています。最近、ノーム・チョムスキーというアメリカの著名な言語学者で平和運動家の「アメリカを占拠する」（ちくま新書）という本を買いましたが、そのように、占拠する対象というのは何も都市の広場だけではなく、いろいろとあるわけです。日本では学生が大学を占拠するということはとっくになくなってしまいましたが、アメリカやヨーロッパの国々では、大幅な学費値上げや、教職員の削減、学部の改廃といったネオリベ的な「大学改革」に反対して大学を占拠するということが、現在でも行われています。そのような意味で、広場や大学といったある特定の場所を民衆が占拠するということは、その場所を構成している原理を壊して、自分たちにとっての「コモン」として組み替えなおす、ということでもあります。そうしたある実際の場所を占拠するということだけではなく、「言葉の占拠」ということもあってもいいと思いますが、言葉というものがこの世界の中で流通しているあり方を変えることによって政治が変わる、ということもあるはずです。

20世紀の終わりから今世紀初頭にかけて、WTO総会を数万人規模の街頭行動で流会させた99年の「シアトルの乱」や、08年にドイツ・ハイリゲンダムで開催されたG8サミットに対する激しい抗議行動に代表されるような反グローバリズム運動が、世界各地で展開されてきました。「2011年から」のオキュパイ運動は、これまでの反グローバリズム運動とは異なる新しい運動のサイクルの始まりを告げるものであるということは、多くの人々が認めていることだと思います。そうしたオキュパイ運動の特徴として、ネグリとハートが指摘しているのは、「それらの闘争が自らの時間を管理する『政治的な自律性』」をもっているということです。つまり、反グローバリズム運動での時間のリズムは、WTOといった国際金融機関の会合やG8サミットの開催のスケジュールに大きく規定されるものであったのに対して、「2011年から」のオキュパイ運動では、広場の占拠をいつまで続けるかということ自体が運動の参加者によって決定されるものだということです。

そうした「2011年から」のオキュパイ運動に象徴されるような新しい運動のサイクルがどのよう

にこの列島上に到達しているかどうかということが、現在の私たちにとっての重要な問いとしてあるように思います。ネグリとハートの「宣言」では日本の運動については全く触れられてはいないのですが、そのようなことで言えば、「3・11」以降、日本の各都市の街頭や原発立地現地で繰り広がられている反原発デモや、再稼働阻止に向けた直接行動が、全世界的な新しい運動のサイクルに相当するものなのではないか、と思います。今回の「アンラーニングⅡ」のプログラムでは、「ポスト3・11の反原発運動」を考えるということが主なテーマの一つになっていますが、その際に、この国での「3・11」後の反原発運動の中に新たな社会構成的プロセスがいかに孕まれているかということが、論議の重要なポイントとしてあるように思います。

以上、お話ししてきたように、ネグリとハートの「宣言」を読むことで、「2011年」からのオキュパイ運動の意義をどのように捉えるかについての大きな手がかりを得ることができたように思っています。同時に、それを通じて、この間、私たちが「日本の『構成』的解体」と言っていることは、全世界的に見て運動的な根拠が確かにあることを改めて認識することができたことを、私として嬉しく感じています。

□「アンラーニングⅡ」との関連から「私の検索歴」を振り返る

今年の夏から秋にかけて、「日本の『構成』的解体」ということに引きつけてインターネットで何を検索してきたかについての一端を、今日の私の話のレジュメの「私の検索歴」という見出しでまとめました。

その中の項目の一つとして、「日本の冒険小説　『燃える波濤』」と書きました。「燃える波濤」というのは森詠という作家が書いた一種の「ポリティカル・フィクション」で、残念ながら未完ですが、とても面白い小説です。その内容を簡単に言うと、自衛隊内部の「新桜会」という秘密のグループがクーデターを起こし、新たな「大東亜共栄圏」の創設を目指すのですが、それに対抗して日本の民衆側も「共和党」という抵抗勢力を結成するという話です。福島原発事故があった時に、私は、なぜ原発事故に抗議してそこを占領しようと思うような人間が誰もいないのか、といった不謹慎なことを考えていたのですが、その小説の中にも、民衆側の抵抗運動の一環として、能登原発を占拠して、「国家が私たちを攻撃すれば、原発を爆破する」と脅迫する、といったことが出てきます。そのように、ある社会の中でどのような冒険小説が生み出されるかということは、その社会のもつ社会的な想像力というものがどうあるかを示す一つの指標であるという意味で、興味深いと思います。

「日本の冒険小説」の項目の隣にあるのが、「日本共和国・連邦構想」です。明治の自由民権運動の時代の民権運動家・植木枝盛の憲法草案である「東洋大日本国々憲案」の中でも、日本の「連邦制構想」が提起されています。そのことを最もリアルに感じてきたのは沖縄の人々だと思いますが、沖縄ではヤマト国家との連邦制構想を考えようとしてきた思想的な流れがあります。インターネットを見ていると、中には、敗戦後の国家権力が充分に及ばない時期に出された「幻の大島共和国」という記事もあって、興味をそそられます。そのように、この国でも、連邦構想や共和国構想を考えようとしてきた系譜があるのですが、それも、ある意味では、この国で社会的な想像力や構想力がいかにあるかを示すもののように思います。

そのような日本における「独立共和国への夢」といったテーマも、当初は「アンラーニングⅡ」でのプログラムとして考えていたのですが、むしろ、私たちに差し迫った課題として、「地域主権改革

の行方」ということを今回の「アンラーニングⅡ」でのテーマの一つにしました。「地域主権改革」と言っても、ほとんどなじみがないと思いますが、そうした言い方をするようになったのは民主党政権になってからのことで、自民党政権時代には「地方分権改革」と言っていました。

詳しい話は次回の「アンラーニングⅡ」でしたいと思いますが、小泉内閣時代の「市町村大合併」を軸とする「地方分権改革」をネオリベ型「国家再編」の第一段階だとすると、現在の「地域主権改革」はその第二段階に入ろうとしている、ということなのです。関西の財界人などがよく「道州制」の導入を提唱していますが、つまり、グローバル資本がこの列島に「足場」を確保して自由に動き回ろうとする際には、そのエリアは現在のような都道府県単位では小さすぎるので、できるだけ大きなエリアである方がグローバル資本にとっては都合がいい、ということです。現政権での「地域主権戦略会議」では、すでに地方議会をどのように「改革」するかとか、地方議会と首長との関係をどうするか、更には、住民投票をどこまで認めるか、といった話が出てきています。将来的には、「地方政府基本法」を制定しようという話さえ出てきています。富山の私たちは、「地域」ということにこだわって運動を進めてきたはずなのですが、気がついてみると、「地域の自治」や「地域からこの列島を再構成する」といった自分たちのキーワードが、支配の側に奪われてしまっています。残念ながら、運動の側は、そのことを全く問題にしていないのが現状ですが、そうした状況に対抗する上でも、私たちの側の社会的な想像力や構想力がどのようにあるかということが、問われているように思います。

先程も言ったように、この後の「アンラーニングⅡ」のテーマとして、「ポスト3・11の反原発運動」を考えることを予定しています。現在、「3・11」以降の反原発デモや街頭アクションについて触れたものが少しずつ出てきていますが、そうした動きに孕まれている新たな可能性がどのようにあるかといったことについて、運動側の共通の認識が成立していないように思います。そのような意味でも、一度はそうした論議をきちんと行いたい、と考えています。

「アンラーニングⅡ」の案内チラシにもありますように、今回の「アンラーニングⅡ」の締めくくりとして、「問題をもちかえる――さらに日本の『構成的』解体の方へ」という集いを予定しています。「もちかえる」というのは、問題を捉える際のもちかたや見方を変えるということであると同時に、今日のこの場に参加している皆さんはそれぞれ様々な問題に取り組んでいると思いますが、このような場で論議されていることをそれぞれの運動の現場に「もちかえる」ということでもあります。それはもちろん、その時の話だけに限られることではなく、「アンラーニングⅡ」での論議全体を通じてそのことがどう成り立つのかを考えていきたいし、先程から述べてきたようなテーマを通じて、「日本の『構成的』解体」ということのイメージを少しでも豊かなものにすることを試みていきたいと考えています。